

二〇二五年度

適性検査Ⅰ

注意

- 1 問題は **1** のみで、**3 ページ** にわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は **五十分** で、終わりは **午前九時五十分** です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい**。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受検番号** を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

共立女子第二中学校

1 次の文章を読んで、あとの問題に答えなさい。(本文には一部改めたところがあります)

64万人。何の数字かという、日本で2021年に人口が減少した数だ。私が暮らす島根県の人口と大きく変わらない。減少は当面続き、幅が拡大するという推計もある。では、①これからの人口減少にどう向き合っていくべきなのか――。ヒントになるのが、交流人口でも定住人口でもない第3の人口の考え方「関係人口」だ。

16年ごろに生まれた新しい言葉で、離れていて特定の地域に愛着を持ち、商品を継続的に買ったり、通ってイベントやお祭りを手伝ったりする人たちを指す。どの地域でも思い当たる、または、自分自身が当てはまっているという人もいるかもしれない。

関わる側からみると短期間訪れる交流や観光ではなく、長期間暮らし続ける定住でもない、間にある新しい地域との関わり方だ。地域側から見ると観光客よりも関わりが深い定住はしない人たちで、「観光以上、定住未満」とも言われる。政府が「地方創生」の一環で推進し、全国の自治体を中心に知られるようになった。

人口減少に伴い、各地で引越費用助成など移住者への支援が提供

され、一種の「奪い合い」が起きている。ただ、全体が増えない中で移住者を奪い合うことは、どこかの自治体は増えてもどこかの自治体は減る「ゼロサム問題」が発生する懸念がある。実際、自治体の担当者から「奪い合っているだけでは未来が見えない」と悩みを相談されたこともある。

現場では、地域づくりをはじめとしたさまざまな分野で人材不足が指摘される。総務省が行った地域の生活や福祉、子育ての支援などを運営する7207組織の実態把握調査で、抱える課題としても多かったのが「担い手の不足」で、76・1%にのぼった。リーダー人材の不足(51・5%)、次期リーダー不足(56・2%)、事務局人材の不足(45・5%)も多かったのに対して、活動資金の不足は36・1%だった。課題は「お金よりも「人材」なのだということが、この結果からうかがえる。

では、どうすればいいのか。そのヒントになりそうなお話がある。

都市に住む学生や若い世代向けに講演をすると、こんな悩みを打ち明けられることがよくある。

「地元愛について聞かれても、いつもうまく答えることができません」
「郷土愛が生まれません」

愛着やつながりを持ち、「ふるさと」と感じられる場所がないことに、喪失感を抱く人たちは少なくないのかもしれない。ふるさととは、「ただい

ま」「おかえり」という関係性やつながりがある場所のことなのだという。住民同士のつながりが都市よりも残っている地方は、若い世代に魅力的に映っているのだと感ずることが最近増えた。

ここで提案したいのが関係人口だ。都市の人にとって地方と関わることで新しいふるさと、つながりができる。地方の人にとっても、関係人口が新しい担い手となれば課題解決につながりやすく、*ウインウインになる可能性がある。

②「関係人口との協働」は、すでに実践されている。島根県邑南町羽須美地域は、その成功例として知られる。過疎化が進み、18年に町内を走る旧JR三江線が廃止された。地域衰退の危機の局面だが、「鉄道はなくなっても、地域がなくなるわけではない」と掲げるNPO法人・江の川鐵道が立ち上がった。

残される線路や駅を生かそうとトロッコ型車両を導入。運行や安全管理を担うのは、隣県の広島をはじめ、全国から通う「関係人口」の人々だ。トロッコ運行を担う男性は「外部の人を受け入れ、そして自分の人生をかけて地域を盛り上げていこうと活動している地元の方の存在に背中を押されている。この動きを何とか成就させなくてはならない」という。

トロッコ型車両は週末中心の運行ながら、風を受けて本物の線路を走り

抜ける爽快感が人気を集め、22年度の乗客数は1600人、駅への入場者は1700人と、むしろ廃止前より地域に人を呼び込んでいる。江の川鐵道の日高弘之代表理事は「一緒に取り組んでくれている関係人口の方たちがいるからできている。外にいる仲間として頼りにしている」と語る。定住しなくても課題解決はできるのだ。

定住人口は、どこに住民票を置くかというゼロかイチかの選択となりやすい。それに対し関係人口は複数の関係先を選ぶことができる。1人の関係人口を各地域が奪い合うのではなく、むしろ関係人口という人材や持っている才能、スキルをシェア（共有）する考え方だと言ってもいい。定住人口ほど過剰に奪い合う必要はないだろう。

人口減少を「食い止める」視点や取り組みは確かに重要であり、進めていく必要がある。しかし一方で、当面の人口減少を前提に、人が減っても幸せな社会をどう構築していくのかというもう一つの問いに、より具体的に向き合う必要があるのではないだろうか。

〔田中輝美「地方季評―定住未満の『関係人口』」（朝日新聞2023年6月8日朝刊オピニオン面）による〕

（注）*ウインウインになるⅡ自分にも相手にも利益になる

〔問題1〕「^①これからの人口減少にどう向き合っていけばいいのか――

ヒントになるのが、交流人口でも定住人口でもない第三の人口の考え方
「関係人口」だ」とあるが、「関係人口」とはどういう人たちのことをさ
すか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

なお、や。や「なども、それぞれ字数に数え、一まずめから書き
始めること。

〔問題2〕「^②「関係人口との協働」は、すでに実践されている。島根県
邑南町羽須美地域は、その成功例として知られる」とあるが、この例を
参考にして、あなたの住む地域の「関係人口」を増やすとしたら具体的
にどのようなアイデアが考えられるか、理由とともに提案しなさい。

次の「**きまり**」にしたがって、三百字以上四百字以内でまとめなさい。

〔きまり〕

○ 最初の行から書き始める。

○ 各段落の最初の字は一字下げて書く。
だんぐ

○ 段落をかえたときの残りのますめは字数として数える。

○ 、や。や「なども、それぞれ字数に数える。ただし。と」

は同じますすに入れ、一字と数える。